

国民啓蒙のプロジェクトとその論理的構造

～「日本のオリエント」沖縄をめぐる～

長谷川 精 一
倉 本 香

〈目 次〉

第1章 「啓蒙するフマニタス」と「啓蒙されるアントロポス」

倉 本 香

第2章 沖縄言語論争

一森有礼の「簡易英語採用論」との対比からの一考察一

長谷川 精 一

第1章 「啓蒙するフマニタス」と「啓蒙されるアントロポス」

倉 本 香

はじめに

1879年のいわゆる「琉球処分」以降、現在の沖縄が政治的には日本の領域内に組み入れられることになったが、新たに組み入れられた日本の中にいかにして自己を位置づけるか、という問題は沖縄の人々にとっては自らのアイデンティティーを揺るがす問題として受け取られた。たとえば富山一郎氏が指摘している如く⁽¹⁾、日本人の限界領域にあるアイヌや沖縄の人たちを観察・分類していく過程の中で「日本人」を確立し、さらに「日本人」との対比の中で「琉球人」を発見して浮かび上がらせる、という人類学的な探求に顕著なように、沖縄の人たちのアイデンティティーはつねにその合わせ鏡としての「日本」あるいは「日本人」を伴って形成されていったのである。「琉球」あるいは「琉球人」が自らを映し出す鏡と、「日本」あるいは「日本人」が自らを映し出す鏡は、時には両者が一体化した

姿を映しだし、時には決して一体化することのない差異を映し出したが、それらの鏡像にしたがってそれぞれが描く自己像は増幅しながら形成されていった。

本章ではこの二つの鏡が自己像を映し出す構造を明らかにすることを課題とする。その際、沖縄の民族的アイデンティティーを確立しようとした思想家、伊波普猷の「日琉同祖論」を端緒とする。第一節では伊波の「日琉同祖論」を取り上げ、その特徴を素描する。伊波の論は単純な同化論ではなく、個性としての異種的、特殊的なものを包括する類的な同一性を目指すという点で、後の日本の帝国主義的膨張を多民族主義的国家の確立の理論として思想的に正当化しようとした田辺元の「種の論理」の先取りとも見られるが、続く第二節では田辺の「種の論理」を取り上げ、このような理論を支えた思想的基盤を近代的人間観を支える思想にまでさかのぼって考察し、他者を観察・分類し、統合する知のあり方がいかに他者を抑圧し、いかにしてその抑圧を隠蔽してきたかを考察する。観察・分類する側と観察・分類される側という、自己像を希求する二つの志向性が交錯する地点でいったいどのような自己像がそこに映し出されていたのであろうか。本章ではこの問題を考察するためにさらに第三節で、1903年に大阪・天王寺で開催された第五回内国勸業博覧会の「学術人類館パビリオン」⁽²⁾を取り上げる。このパビリオンには、人類学研究の材料として生身の「琉球人」が「展示」されていたが、「学術的な」視点で「琉球人」を観察・分類することが、なぜ展示された「琉球人」の周りに「好奇心」視線を引き起こしてしまうのかを理論的に解明し、おのおのの鏡に映った自己像が、本来、希求されていたものとは異なる、歪んだ自己像だったことを明らかにしたい。

<1>伊波普猷の「日琉同祖論」

「琉球処分」以降、沖縄では日本への同化論と、それに反発する琉球王朝復活論とが唱えられていたが、1896年に太田朝敷らが関わった「公会社事件」後では、急速に同化熱が高まっていった。この事件は、琉球処分の際に東京へ連れ去られた旧琉球王を県知事に据えて、本土とは異なる特別制度を沖縄にしく嘆願書を政府に提出し、拒否された、という事件である。すでに日清戦争で清は敗北しており、したがって清による琉球王国復活の希望を語ることは不可能であったが、太田らの嘆願書も拒否された以上、もはや琉球王国復活の望みは完全に絶たれ、日本への同化論を唱える選択肢しか沖縄の人々にとっては残っていなかった。周知のように日本の近代は、琉球、アイヌ・モシリ、台湾、朝鮮、そして内南洋と呼ばれる、マリアナ、カロリン、パラオ、マーシャルの諸群島からなるミクロネシアを手中に収め、フィリピン、インドネシアへと帝国主義的に侵出していく「大東亜共栄圏」拡大の過程として描くことができるが、沖縄が他の日本の植民地と異なっていたのは、1889年に早くも沖縄で徴兵制が実施されていることから明らかなように、「琉球処分」以降、沖縄が日本本土の他府県と制度的にはほぼ同じになったという点である。こうして

沖縄では、同化を促進し、一日でも早く「日本人」になることが目指されたのである。そして太田朝敷は、1900年には

沖縄今日の急務は何であるかと云へば、一から十まで他府県に似せることであります。極端にいへば、くしゃみする事まで他府県の通りにすることでありませす。⁽³⁾

と語るようになる。このような時期に伊波は「日琉同祖論」を唱えたのである。

伊波が「日琉同祖論」を発表しはじめたのは、彼が上京した後の、高等学校在学中の1901年である⁽⁴⁾。彼は、日本語と琉球語は非常に近い関係にあり、両者には共通の祖語が想定される、というチェンバレンの琉球言語研究をもとに、沖縄は

『古事記』中のことばに類似せる言葉をあやつり、『古事記』中の神話を髣髴たる神話を有し、而も日本古代の遺風らしきものを多く残留せる。⁽⁵⁾

と述べている。また、帰郷したのち伊波は『琉球新報』に沖縄史についての連載を始めるが、そこで彼が主張した論として着目すべきなのは、人類学者鳥居龍蔵の研究を下敷きにして、沖縄人が日本人と同祖であると立証した論である。鳥居は、沖縄本島や八重山群島の遺跡を発掘して、沖縄にはかつてアイヌが住んでおり、八重山には15世紀頃まで台湾の「生蕃」と同種のマレー系人種がいた、とする学説を唱えていた。土器や土俗的な調査のみならず、身体測定、毛髪、顔形、頭形、鼻形、皮膚の色などの項目にわたって生蕃を調査した鳥居は、その測定法をそのまま沖縄人にも適用し、生蕃と沖縄人との類似性を語ったのである。また人類学者の中には、アイヌの木彫り模様と日本の石器時代の土器の文様との類似性に着目して、アイヌの中に日本の石器時代人との人種的同一性を主張した者たちがおり⁽⁶⁾、当時の日本の人類学では、古代の日本列島にはアイヌやマレー系の先住民族がおり、そこに大陸系民族が渡来して混血し、日本民族が形成された、とする論が主流を占めていた。したがって、沖縄人がアイヌやマレー系と混血しているという説は、沖縄人が血統的には日本人であること、すなわち、日本人と同祖であることを証明するとみなすことができる、というのが伊波の基本的な主張である。

伊波の「日琉同祖論」には、以下の二つの特徴を認めることができる。まず第一に、それが単純な同化論ではなく、同祖というものを設定することで沖縄の中に混入している日本古来の精神的産物を保存する義務がある、と唱えた点である。日本への連続性を持つ沖縄独自の言語や神話の保存は同時に日本の民族的、文化的伝統を保存することでもあり、この意味において、日本とは一致していない沖縄の持つ独自性も「個性」として保存の対

象とされたのである。

只今申し上げたとほり一致している点を發揮させることはもとより必要なことで御座りますが、一致していない点を發揮させることも亦必要かも知れませぬ。⁽⁷⁾

私は沖縄人がこの一致している所を大に發揮させるといふことは即沖縄人をして有力なる日本帝国の一成分たらしめる所以のものであらうと存じます。⁽⁸⁾

このように伊波は、沖縄人の個性を尊重しつつも日本との調和を目指したのである。

第二の特徴は、琉球人がアイヌやマレー系と混血しているという説では、琉球人の中にアイヌや生蕃に分類される徴表をも読みとることになる、という点から導かれる。当時の沖縄では、アイヌは「未開」であるという蔑視に支えられて、沖縄人はアイヌとは違う、という世論が起こっていたのである。太田は、「沖縄は決して日本の新領土にあらず」とのべ、沖縄が「植民地」ではなく「日本」であること強調し、「北海道のアイヌと同一に」沖縄人を見なされることを激しく攻撃し、1903年の学術人類館の展示についても、『琉球新報』の中で、琉球人をアイヌや生蕃などと同列に扱って展示したことに対して反発し、次のように語っている。

我輩は日本帝国に斯る冷酷な国民あるを恥つるなり、彼等が他府県に於ける異様の風俗を展陳せずして特に台湾の生蕃北海のアイヌ等とともに本県人を撰みたるは是我を生蕃アイヌ視したものなり、我に対する侮辱豈之より大いなるものあらんや、……本県の教化今や駸々として上進し服装の如きも男子は十中の八九は既に之を改め女子と雖も改装するもの年々其数を増加する勢あり。⁽⁹⁾

もともと同祖とは、日本側が沖縄や朝鮮などを同化しながら差別するために、「日本人であって日本人ではない」者として彼らを位置づけた言葉であった。実は同祖という概念そのものの中にすでに他者を差別化する枠組みが入り込んでいるのだが、したがって、「日琉同祖論」は琉球人が「琉球人であって琉球人でない」者を差別化する論に容易に転換するのである。琉球処分後の沖縄人の発展について伊波は1907年の講演で次のように述べている。

何人も大勢に抗することは出来ぬ。自滅を欲しない人は之に従はねばならぬ。一人日本化し、二人日本化し、遂に日清戦争がかたづく頃にはかつて明治政府を罵つた人々の口から帝国万歳の声を聞くやうになりました。⁽¹⁰⁾

そしてこのように発展した沖縄人について伊波は、アイヌや生蕃とは区別されるべきであると述べるのである。

吾々の方にもかうなるべき個性があったといふ事を少しは言はせて貰ひ度いのであります。為政者や教育者が如何に偉くとも、沖縄人がアイヌや生蕃と同じ程度の人民であつたら、三十余念にしてかういふ成績を見る事はとても出来ないだらうと存じます。⁽¹¹⁾

このように伊波の「日琉同祖論」には、個性としての沖縄を尊重するという考えと、そのような個性を持ちつつも日本と同一性を有する沖縄は、アイヌや生蕃とは違うのだ、という主張が混在している。ではいったい、独自の個性として尊重されるべき沖縄の独自性の中に、アイヌ・生蕃と、日本人という、自らとは差別化、あるいは差異化される他者の徴表が潜んでいるとする矛盾は、いかにして解消されるのであろうか。次の伊波の論に着目したい。

天は沖縄人ならざる他の人によつては決して自己を発現せざる所を沖縄人によつて発現するのであります。……沖縄人が日本帝国に占むる位置もこれによつて定まるものと存じます。……日本国には無数の個性があります。亦無数の個性が生じつつあるのであります。かくの如き種々の異なつた人民を抱合して余裕のある国民がすなわち大国民であります。⁽¹²⁾

伊波の言う「大国民」とは、「琉球人」でもなければ「日本人」でもなく、両者の「個性」をともに抱えこみ、統合した、ベネディクト・アンダーソンの言う、「想像の共同体」⁽¹³⁾の構成員としての、いわば理念としての国民である。富山一郎氏はこの伊波の「大国民」は、後の「大東亜共栄圏」における「協同主義」をも射程に入れて議論されなければならないと指摘している⁽¹⁴⁾。事実、沖縄人の日本への同化の欲求は、日本が総力戦を戦った時期においても顕著に見られる。

この大東亜戦争に勝った暁には、僕ら沖縄の人間は、日本人と同等に扱われる。だから僕らも戦争に勝ったならば、日本へ行って家族和気あいあいとして生活できる。⁽¹⁵⁾

これはある沖縄出身の日本軍兵士が綴った言葉である。沖縄人の日本への同化の欲求の果てには戦死が待っていた。「同祖」と「大国民」という言葉で語られた伊波の「日琉同祖論」

は、やがては戦死へと至る同化の道程を正当化する協同主義の議論とどこが似ているのであろうか。複数の民族からなる多民族国民国家を構想する議論が1920年から30年代にかけて日本で盛んになるが、その中で、まさに当時の「帝国」大学の哲学教師である田辺元が日本の帝国主義的政策をいかにして正当化しようとしたかを以下で見ていきたい。田辺の理論と伊波の理論は、個性としての異種的、特殊なものを包括する類的な同一性を目指すという点で同類型であるが、その論理的構造を取り出してみせることで、近代的な人間観の持つ特有の歪みを抉り出してみたい。(以下次号)

- (1) 富山一郎「『琉求人』という主体—伊波普猷における暴力の予感—」『思想』、「国民の誕生と『日本人種』」『思想』、1994年、参照。
- (2) アイヌ、台湾生蕃、台湾土人、台湾熟蕃、琉球人、朝鮮人、インド人、ジャヴァ人、トルコ人、マレー人、ザンヂバル島人がそれぞれの種族ごとに区切って「展示」されていた。松田京子「パピリオン学術人類館—世紀末転換期における「他者」表象をめぐる知—」、『日本学報』、15号 1996年、参照。19世紀半ばから20世紀初頭に至るまでの博覧会の時代は同時に帝国主義の時代でもあった。1851年のロンドン万博以来、博覧会の主催者は、植民地や自治領からの出品を帝国の展示としてまとめ上げることに気を配り始めた。とりわけ1889年のパリ万博は、植民地部門の展示に大きなスペースをさいたが、そこではセネガルやニューカレドニア、仏領西インド諸島、ジャワ島等の植民地の原住民を会場に連行し、柵で囲った集落の中で生活させる、という「人間の展示」が行われた。この展示は、89年のパリ万博に始まり、93年のシカゴ博、20世紀初頭のアメリカの万国博、また同じ頃のヨーロッパの博覧会、そして、日本の内国博覧会でも行われた。吉見俊哉『博覧会の政治学』、中央公論社、1992年、184頁。
- (3) 『太田朝敷選集』琉球新報社、1993—96年、中巻58頁。
- (4) 伊波についての以下の論は小熊英二『「日本人」の境界—沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで—』、新曜社、1998年、「第12章 沖繩ナショナリズムの創造」を参照。
- (5) 『伊波普猷全集』第一巻五二五頁。
- (6) 白井光太郎、山中笑、佐藤重記などである。またアイヌを日本の石器時代の人種に分類する際、日本の石器時代には土器が発見されているのに現在のアイヌには土器がない、という論点に関して、小金井精良は、アイヌは精神的に退歩し、無気力であるからかつての土器の製法や使用法を忘却している、と唱えた。小金井のこの論は、アイヌを無気力な未開人としてカテゴライズする偏見に満ちたものであるが、富山一郎は、この偏見は、アイヌの「現在」と日本人の「石器時代」という時間性をアナロジーと

いう技法によって結びつけることで引き起こされる、と分析している。(富山、『思想』、1994年)。一方では同種性を主張しつつもなぜ偏見が同時に引き起こされるのかを明らかにする論としてこの指摘は注目すべきである。

- (7) 伊波普猷『古琉球』沖縄公論社、1911年、一〇〇頁。
- (8) 伊波、同所。
- (9) 『太田朝敷選集』中巻二一三頁。
- (10) 『伊波普猷全集』第七卷八頁。
- (11) 伊波普猷『古琉球』一〇五頁。
- (12) 同書、一〇一頁。
- (13) B.Andersons, *Imagined Communities*, Verso,1991.
- (14) ここで富山が比較にあげているのは、「大東亜共栄圏」構想のブレーン、平野義太郎である。平野によれば、協同主義とは原住民の社会生活の伝統を尊重し、それを固有の方向に発展させつつ抱合するという、「個別的特殊的」なもので、平野はそれを、画一的な同化政策とは異なると主張した。富山によれば、平野の、「本源的な文化的同質性を諸民族に定義し、かかる後にそれらを協同主義の名のもとに大東亜共栄圏に抱合しようとするこの理念は、種差を定義する作業が同時に類的な同一性へと向かう伊波の議論と酷似している」。富山一郎「「琉求人」という主体—伊波普猷における暴力の予感—」『思想』、15頁。
- (15) 富山一郎『戦場の記憶』、日本経済評論社、1995年、8頁。